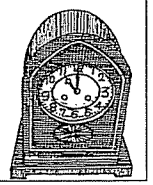
特集［牧口常三郎の思想と行動］

Feature : The Thought and Conduct of Tsunesaburo Makiguchi



■てい談

牧口常三郎の信仰と教育

熊谷一乗＋辻　武寿＋蝦名友秋

熊谷　教育と宗教の関係というと、大きなテーマですが、明治以降の日本の教育の歴史をふり返ってみますと、はじめに信仰があり、布教活動の一環として教育実践へ、というコースを辿ることが多い。ところが、牧口常三郎先生の場合は、教育者としての深い見識と豊かな経験をもとに研究を重ね、教育学の本を著そうとする過程で、信仰の世界に入られ、人生に新たな地平を開かれた。近代の教育の歴史の上でも珍しいケースではないかと思います。

熊谷一乗氏

辻　武寿氏

そこで、牧口先生から直接教えを受けられたお二人の大先達から、教育者としての牧口先生と日蓮大聖人の仏法との出会いといいましょうか、そのあたりのことから……。

蝦名　青森で小学校の教師をしていた私が、最初に牧口先生にお会いしたのは、昭和十三年一月のことでした。先輩に連れられて東京・目白の自宅を訪問したんですが、「教育とは、子どもを幸福にすること」等々、三時間ほど教育論、そして価値論について烈々と話してくださり、感激しました。それで「先生、その創価教育学を教えてください」とお願いしましたら、「信仰しないと心が通じない。信心しなければ創価教育はできない」と言われた。

なぜだろう？　それが、この間までの疑問だったんですが、やはり、創価教育の根底は子どもたちに幸福な人生を歩ませたいという慈悲の心だと思うんです。ですから、そのためには、教師自身が境涯を広げ、その慈悲の精神に立たなければ本当の創価教育はできない。言い換えれば、教師自身が信仰によって、自分の境涯を広げて人間革命することが、その前提として必要だったからではないでしょうか。

蝦名友秋氏

辻　信仰に関係なく、牧口先生はずっと前から「関係性」を重視してこられましたよね。自分の住んでいる郷土との関係、その郷土と日本、世界との連関……。学問にしても、自分達の生活に関係する身近な事柄から、次第に広がっていく。あるいは、そこに共通するものを見出していくところに、学問の深まりがあるわけです。その牧口先生なりの結論が「価値論」ということになるんでしょうが、宗教にしても、問題は、その関係性ですよ。

熊谷　宗教即教育と言いましても、宗教にもいろいろあります。牧口先生の時代、田中智学の国柱会などは随分、人を引きつけていたようですし、他にも、禅、神道、キリスト教といろいろあったわけですよ。特に牧口先生の場合には、明治の末期から、新渡戸稲造とか、比較的キリスト教の信仰者との折衝がありましたね。ところが、キリスト教の信仰に入られていない。禅も国柱会も選ばれていない。

蝦名　宗教が生き方の根本となるものだからこそ、民衆が幸せになる、生活が良くなっていく、そのための最高の宗教というものを探しておられたのだ、というのが私の実感です。

熊谷　牧口先生が入信されるまでに書かれたもの、『創価教育学体系』も初めの方はそうですが、非常に科学とか合理性、実証性を重視しておられる。それが「価値論」の後半のあたりから、宗教、特に仏法に関することが随分取り上げられてきます。

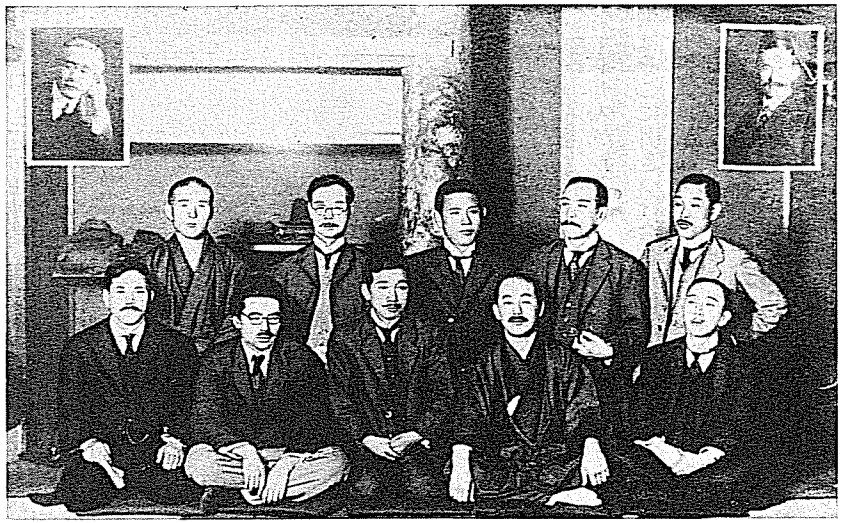
科学や合理性を重んじられた牧口先生が、なぜ、信仰の世界に入られたのか。日蓮大聖人の仏法を選ばれたのはどうしてなのか。そこのところが、牧口先生における教育と宗教を考える上で、重要なポイントになりはしないかと思うんですが……。

辻　経験から来てるんですね。生活から学問へ、そして学問からまた生活へ――創価教育の特徴の一つは「生活と学問の一体化」ですよ。そこに普遍性が出てくる。

先ほども言いましたように、牧口先生は、絶えず人間、生活との関係を考えながら『人生地理学』を著した。牧口先生自身、述懐されていますが、人生とは価値の追求であるとの考えは『人生地理学』以来、一貫してますよね。自分の生活、自身の人生にとって美か醜か、利か害か、善か悪か――。僕らもね、真理と価値とは次元が異なる、価値体系は真善美ではなく利善美だと言われて、〝あーなるほど〟と思いましたね。それで価値論に引かれて創価学会に入ってみようと。もう亡くなりましたが、小泉隆さんの説明が上手だったのかもしれないけれども（笑い）。

それが、信仰によってますます確たるものになった。つまり、日蓮大聖人の仏法に出会って、生活との関係が宇宙大にまで広がると聞いて、これなら最高の大善生活ができる、と歓喜したって言うんですね。そして、それを実験証明して、万人が本当に実践できるという大確信に行き着いたんですよ。仏法では「事の一念三千」と言ってますからね。理じゃないんです。自分自身はもちろんのこと、周囲の人々の幸福も、また国土をも楽土にしていくのが、「事の一念三千」の南無妙法蓮華経の力ですから。他の宗教じゃ、そういうことはできない。

蝦名　仏法は合理です。非合理じゃないんだよね。戸田城聖先生の小説『人間革命』に、牧口先生が信仰に踏み切る場面があります。学説は学説、哲学は哲学、宗教



前列左端が牧口。明治43年に新渡戸稲造、柳田國男らを中心に「郷土会」が発足。少壮の知識人や学者ばかり20人ほどのメンバーが集まり、互いに親交を深め、毎月１回の定例会では研究成果を発表した。

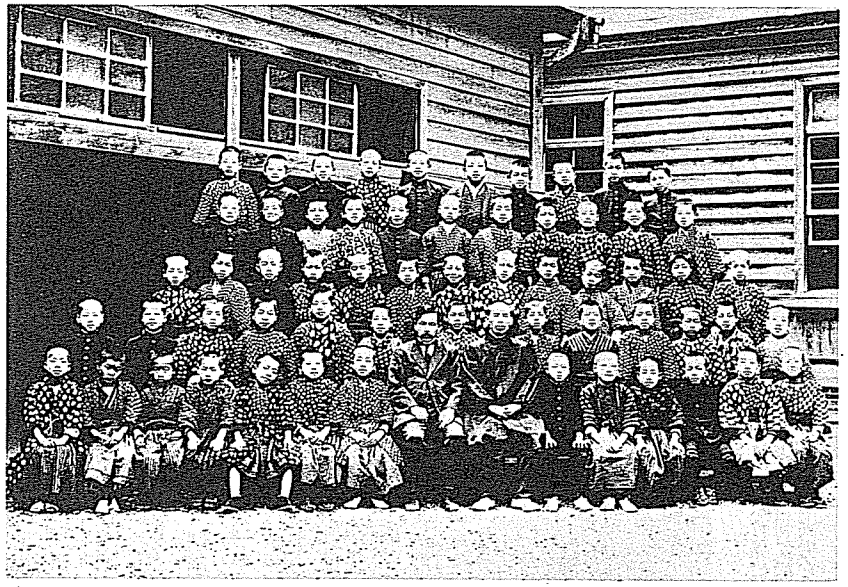
は宗教と、それまで個別に認識されていたものが、仏法に出あって、牧口先生の科学的、実証的な鋭いまなざしで凝視しても納得させるだけの科学性、普遍性を仏法は持っていたということだね。

熊谷　「価値論」の終わりの方だと思いますが、仏法の中に科学、道徳等、世間の一切のことが包摂されるという捉え方をされてますね。だからこそ、入信されてからも科学を大切にされ、実験証明を重視されたとも言えます。確か、牧口先生は思い切って入信されたときの喜びの気持ちを説明するために「天晴れぬれば地明らかなり法華を識る者は世法を得べきか」という大聖人の御書の一節を引かれてますね。

辻　そうですね、仏法即世法。世法とは生活のすべてだから、仏法という大地の上に、教育だとか、文化だとか、科学だとか、いろんな生活が花開いていく。逆に、深く世法に通ずれば自然に仏法を得ることになる。大聖人の仏法に接してすぐ分かったんじゃないかな。牧口先生は頭いいから（笑い）。

特に信仰というものが、私達の生活とどういう関係があるのか。法、即ち仏法との関係で、生活上にどのようなマイナスがあるか、どういうプラスがあるか。牧口先生はそこに引きつけられたようですね。つまり、罰と利益ですよ。仏法のリズムから逸脱すれば、罰がある。合致すれば功徳がある。実験だからやってみることが大事だと。モルモットではなく人間そのものの実験だから、真剣勝負だとよく言いましたよ。実験証明なんです。

右が牧口。左は戸田城聖。西町尋常小学校で校長を務めていた牧口は、戸田を採用する。戸田は牧口を師と仰ぎ、二人は深い師弟の絆で結ばれた。



白金尋常小学校の児童と記念撮影。中央が校長の牧口。

蝦名　だから、言行一致、理論と実践が伴わなければいけない、と我々は教えられてきたんだね。

辻　創価教育では、子どもたちの学力をどうレベルアップできるか。実験するにも信心しないと本当にはできないというので、信仰している教師の中から、創価教育の研究委員が確か六、七人ほど選ばれたでしょう。

蝦名　ええ。私は図画をやったんだが、きちんと効果が上がりましたね。ともかく実践しては牧口先生に見てもらう。自宅に伺った時「図画も習字も、書き方も同じ原理なんだよ。だから、将来、あなたが書き方の指導案を作りなさい」と言われたんですよ。創価小学校に勤めるようになってから、そのことを思い出して創価教育学に基づく書き方指導案を創り出しました。それが今各地で成果をあげています。それで創価教育の考え方を応用した書き方の手本が明年、出版社から出ることになっています。

熊谷　牧口先生の書かれたものを読む限りでは、仏法の世界に入られてから、創価教育学の根幹、根本のところは、法華経に説かれる慈悲なんだ、自分がこれまで言

ってきたことは、いわば枝葉末節の部分に当たると言われてますね。

それが一点と、もう一つ、入信されてから「依法不依人」ということを強調されますね。例えば、『創価教育学体系』第三巻「教育改造論」冒頭のところで、創価教育の目指すべき方向性として「創価教育六大指標」を挙げておられますが、その一つが「依人の依法化」となっています。そのことが、非常に印象的です。

『創価教育学体系』第一巻 昭和5年11月18日発刊。長年の実践に基づく牧口の主張と改革への提言は、教育界に一石を投じた。弟子の戸田城聖は膨大な原稿の整理や発刊に尽力した。犬養毅が題字を、田辺寿利、新渡戸稲造、柳田國男らが序文を寄せる。

辻　そうそう、法なんですよ。「依法不依人」、つまり「法に依って人に依らざれ」。また「心の師とはなるとも心を師とせざれ」ですね。人や心じゃないよ、法だよと。

蝦名　何よりも子どもたちのことを考えられたからでしょうか。牧口先生は、教育の方法というか、どの教師が受け持っても子どもの可能性を伸ばすことができるよう、普遍的な指導法というものを教師に身につけてほしいとの思いが強かったですね。それが、宗教の世界に入られると、生活の法というものを身につけることによって、誰もが幸せになっていける生き方を志向された。教育と生活、生活と仏法、「法」の追求という一点で基本的につながっている。

辻　そうだね。こんな厚い御書を見ている時にも、法という箇所にマルをつけるんですね。いろいろ出てくるから。教育の方法、数学の方程式等にしても根本は一つ、法なんです。法というのは、普遍妥当性。誰もが従わなくてはならない道理、誰もが共通に従うべき普遍妥当な法理です。その最大最高、究極のものが宇宙を貫く法理ですよね。

熊谷　牧口先生の場合、教育法、生活法といわれるものから、普遍的な、宇宙を貫いている法に広がり、それがまさに仏法ということになるのでしょうが、身近な生活から宇宙的な法まで深く、広く捉えられている。

辻　よく言ってましたけどね、普遍妥当性のある医学があって、良い医者があると。ヘボ医者ではいけない。やっぱり医学の方法に練達した上手な医者にならなければ、患者からは喜ばれないし、信頼されない。同じように、教育者も普遍妥当性のある教育学が土台になくてはいけないし、それに基づく教育技術がなくちゃいけない。その上で、楽しくて、分かりやすくて、能率的な、生き生きとした授業ができなくてはいけない。

蝦名　教授主義ではなくて学習指導主義ですからね。あくまでも子どもが主体です。学習の主人公である子ども自身の成長を支えるために、指導の主体としての教師の存在がある。教育方法を追究しているからと言って、

昭和6年1月12日、教育会館内での『創価教育学体系』出版記念会。
左から3人目が牧口。右隣りは牧口の妻のクマ夫人。後列左端は戸田。

それだけにこだわっていると子どもを手段にしかねない。子どもの状況が一人一人異なることを考えれば、基本はあったとしても柔軟性、融通性がなければ、幸福を実現する、価値を創造していく子どもの育成はできませんよ。

辻　飛び抜けた聖人君子じゃなくても、人を幸せにしようという慈愛と誠実さがあれば、指導主義の教育はできるんだと。体操の時など、下手な教師が模範をやるのは駄目だと、よく言いましたよ。体操の得意な子、上手な子がいるはずだから、跳び箱なら跳び箱で、その子に跳ばせて、手の付き方や足の開き方をしっかり見させる。それが指導主義だと。

蝦名　だから、教師は自分のように偉くなれ、というような傲慢な態度で子どもたちを指導するのであってはならない。自分のような人物に満足してはならない。更に偉大なる人物を目標として進もう、そのために自分と一緒に進もうという謙虚な態度を持つことだというのが、牧口先生のお考えですね。

辻　大聖人の教え自体がそうですが、学会は伝統的に指導主義ですよね。民衆の幸福のため、世界の平和のためという〝何のため〟が明確ですし、そのために宗教がある、そのために教育があるわけですから。子どもなり、民衆なりが幸せになっていかなければ、牧口先生が志向された方向は出てきませんよ。

熊谷　創価教育学では、教育の目的は子どもを幸福な生活に導くことだと強調しています。極めて明快です。そして、そのためにどうしたらいいかということで、教育の方法、指導法が問題になってくるわけですけれども、先ほどお話した慈悲ということは究極的な人生の実践目標になるんでしょうか、またそのための手段が依法ということになるのかどうか。

辻　慈悲というのは、実践の上に出てくる問題で、法は理念とか考え方につながるものですね。子どもの成長を祈るという行為は、子どもにかかわっていく実践の面では慈悲の振る舞いになっていくでしょうし、それを支える理念の面では法に基づいて考えていくということになる。

創価教育の実験証明をまとめた「創価教育法の科学的

超宗教的実験証明」という小冊子の中では、牧口先生が実験証明を行う教師を選ぶ条件として、まず、大聖人の仏法を信ずる純真で正しい性格の持ち主であること、そして、その上で正直と慈悲を挙げておられます。本当はいろいろ期待したいのでしょうけれども、とりあえずは「正直にして諂曲ならず、利己主義にあらずして親の如き慈悲心の所有者」を望まれている。

仏法は「事の一念三千」の法理ですから、当然、世法とはつながりますし、慈悲広大ならば、というところにもつながっていくと、私は思うんですよ。

熊谷　親のような慈悲心、理法を理法として素直に受け止め、これに従う依法の精神。これは、教師の基本的な資質として、今日でも欠かせないことですね。加えて、牧口先生は優れた研究心をもつことが大切だとおっしゃっている。これも見逃せません。

蝦名　私は青森にいたもんだから、心配してよく手紙をくださったわけなんだね。その中に必ず「行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る」と並んで「慈無くして詐り親しむは即ち是れ彼が怨なり」の御文が達筆で書かれていたのを、今でも思い出します。

辻　「彼が為に悪を除くは即ち是れ彼が親なり」の御文も、口ぐせのように言ってましたね。慈悲を持って接していく。悪はきちんと除いてあげる。そう言えば、悪いことをするのと善いことをしないのは同じか違うかと、常に糾していましたね。ともすると事なかれ主義の横行する社会にあって、牧口先生は悪いことは正し、善いことを積極的に行っていく人間の輩出を願い、行動された。

蝦名　利害にとらわれたらエゴであり、善悪を忘れたら悪人になってしまう。好き嫌いや美醜というのは、部分的な利益の段階。牧口先生は、部分観のみにとらわれないように、常に全体観に立って、全体と部分の調和を図っていくことが大事だとおっしゃってる。

熊谷　それも真の全体観ですね。つまり、かつてのナチスのような、全体のために個人を犠牲にしてしまうような全体主義を否定されて、如実に全体を見る、そしてその中に自分を位置づけて、他人と自分を関係づけて、共によりよい生き方、共存共栄ができるような考えが大

切だということですね。

蝦名　だから病気の場合でもね、その患部だけを診ないで体全体との関連をおさえた上で治療する医者でなければ駄目だと、よく話されました。

辻　あと牧口先生がよく言ったのが、滅私奉公はいけないと。当時の軍国主義に対しても痛烈でしたね。道理に合わない滅私奉公はできないし、またすべきではない。自己を空にせよというのはウソである。両方とも栄えなければいけないと。あくまでも社会の繁栄と個人の繁栄は一致しなくてはいけないんだから、生きているかぎりは不滅私奉公であるべきだと。

熊谷　個人の幸せと社会全体の繁栄との関係というテーマは『人生地理学』以来ですね。その両方をいかに一致させるか。現実には容易なことではないと思うんですが、それを一致させるための法として、まさに仏法がある。

辻　ですから、牧口先生が若い時から志向してきたことは、大聖人の「立正安国論」の思想に通ずるものがありますね。

蝦名　よく言われるように、仏法の世界に入る時、『立正安国論精釈』を著した三谷素啓さんと「立正安国」の考え方を巡って激論された。

熊谷　民衆一人一人が正法を護持することによって、自己の変革から社会の変革、国土の繁栄を訴えられたのが、今の「立正安国論」ですね。と同時に、牧口先生は、釈尊が法華経で説いた滅後の仏法変遷の予言、いわゆる正法、像法、末法の考え方が、大聖人のご出現と現実の世相によって実証されたことにも驚いておられるんですね。考え方は演繹的なものだけれども、結果は帰納的というか、因果の法則にかなっている。

牧口先生は、先ほどの田中智学の話を何回か聞かれたということですが、同調されなかった。それは、国粋主義と言いますか、彼が、「立正安国」の考えを日本を絶対化した極端な国家主義に曲解していたからです。

蝦名　牧口先生の考え方には世界と宇宙に広がる法としての捉え方があったから反発されたんだね。身近な世界を大事にされるんだけれども、それは身近な世界に閉じこもろうというのではなく、世界につながるんだね。

『人生地理学』には、既に世界市民という発想があります。池田先生（創価学会第三代会長）が、モスクワ大学での記念講演の中で訴えられた世界市民を育成する競争の提案も、牧口先生の人道的競争から発想されています。

辻　いいことをしても迫害される、権力者に睨まれる。やきもちとか、怨嫉の世界を、仏法を信ずる前から嫌と言うほど経験しているわけですよ。「立正安国論」にはそのことがはっきり書かれているし、釈尊の経文にも書かれている。これだけ見通した釈尊がいかに偉大であり、大聖人の「立正安国」のお考えがどれほど素晴らしいことであるか。

熊谷　「安国」の国のところを、田中智学は国家主義に持っていきましたが、牧口先生の場合は、仏法で説く国土世間という広い意味で捉えておられる。そこが牧口先生の偉大さだろうと思いますね。

蝦名　学級と学校という関係で話してくれたことがある。「自分の学級だけよくしようと思っても駄目だ、いつも校長がどういう考えでやろうとしているか、と照らし合わせながら取り組んでいくことが大事だよ」と。

辻　関係性の深いところから見ていくということで、郷土や国を愛する心を大事にされたけれども、それは世界を見ていくことと矛盾するのではなく、両方ともが視野に含まれている。「価値論」で言えば、個人の繁栄は利、社会の繁栄は善、公益は善。だから、よく言っていたのは、電車の中で席が空いているのに立っているのはいけないと。座れば通路が通りやすくなる。皆が通りやすいのが善、通りにくいのは悪。皆に迷惑をかけてはいけないと、絶えず社会のことをおっしゃった。

熊谷　『創価教育学体系』の「教育目的論」で「幸福」について論じられていますが、それも、個人の内面だけを対象とした〝閉じられた幸福論〟ではなく、社会に目を向けた、〝開かれた幸福論〟なのです。ここにも、全体の中で個人を見、個人を通して全体を見ていくという真の全体観に立つ〝共生〟の思想がありますね。

このことは、現代にとっても非常に重要な点だと思います。現代社会は個人主義が浸透しているわけですけれども、しかし、個人だけで生きられるわけではない。個人は大事にしなくてはいけないけれども、同時に全体の

ことを考えなければいけない、個人のためにも全体を配慮することは大切なわけで、牧口先生の思想は大変、現代的な意義があります。

蝦名　よく学生にも言うんですけど、人格論にしてもそうなんだね。いわゆる三種の人間、つまり、居ても居なくてもいい人、居ない方がいい人、居てほしい人。実に卑近な話ですが、アメリカでも池田先生が、この三種の人間について話してくださっているでしょう。今日でもしっかり受け止めなければならない。誰もが人格を磨いて、誰からも居てほしいと望まれる人間になっていかなければ……。

熊谷　現代は、時代の転換期です。社会は非常に複雑で、教育の世界も、方向性が定まらない混迷状態と言っていいでしょう。牧口先生の教えを直接受けたり、経験なさったことが、現代にどのような示唆を与えるか、その点についてもう少し伺えれば……。

辻　私が印象に残っているのは、信仰に入るんじゃない、信仰の世界に出るんだということですね。信仰に入るというと、何だか狭い所に入るみたいだけど、そうじゃなくて、苦しみの世界から安全地帯に出ることになるんだと。今が四苦八苦、これは罰の世界。その罰の世界から功徳の世界に出る。抜苦与楽ですよ。学会は安全地帯なんだとよく言われましたよ。

熊谷　幸せの世界、救いの世界に出ていく。暗黒の迷いの世界から希望に溢れた、明るい悟りの世界に出る。

蝦名　出るっていうことはいいですね。

辻　牧口先生の直接の指導だからね、安全地帯に出るんだよと。

熊谷　今の教育に、迷い苦しみの世界から、幸せの世界、明るい希望の世界に子どもを連れ出していくという面があると思われますか？

蝦名　そういうものがあるんじゃなかろうか、と考えたいんですよね。そうあらしめるためにはどうしたらいいかと。でも、子どもたちの声を聞くと、今の学校は決して楽しいところではなさそうですね。創価教育は、児童をして楽しく、能率的で喜びと希望を与える教育です。現代にこそ、そうした創価教育の実現が強く望まれているという感を深くしますね。

辻　〝何のため〟に学ぶのかが子ども自身の身についていて、子どもが価値的に行動できるような楽しい学校。子どもの気持ちを汲み取る。子どもの幸せを考える。学びの主体である子どもを教育の主体とすることを、教える側が支援していけるような時代、社会にしていかなくてはいけませんね。

熊谷　「教育の場は子ども中心で」と言われますけれども、教育の場の雰囲気作りは結局、教師ですからね。教師がどういう教育観を持って子どもを見守っていくか。牧口先生の思想と実践は大いに参考になると思うんですが、とりわけ、先ほどから出ている慈悲と依法、これが現代の教育においては本当に大事だと、心ある人は感ずるのではないでしょうか。

いじめだとか、偏差値支配など、因った状態の中で、嫌な思いをしている子どもたちを苦しみから解放してやる。そして、学びを喜びとして経験できるような、明るく楽しい教育の場を作り出すためには、教師は慈悲の振る舞いを貫くとともに、依法による教育を実践することが大事だと思うんですよ。現代は、教育基本法により公立学校で特定の宗教を教えることは、禁じられている。ですから、依法の法を広い意味に捉えて、宇宙大の広い心と深い慈悲と法（道理）とを、現代の教育に取り入れ、生かさなければならないと考えるわけです。

蝦名　私はどうしても師範教育が大事であると考えます。教員養成の問題です。それが十分でないから、教育が変わらない。新任の教師を見ていても、ただ知識を覚えているだけのケースが多い。やはり、慈悲と法を大事にする教師であってほしいですよ。指導主義の教育というのは、子どもに力点があって、子どものために教師として何をしてあげられるかだね。四十人の生徒がいれば、四十通りの指導ができるくらいの力量が本当は必要なんでしょうね。少なくとも、慈悲と法に基づいた教師であれば、指導主義の達人を目指して、絶えず向上していけるんじゃないかな。

辻　妙法の教育者というのは御本尊に祈れる、そこから慈悲や知恵をどんどん汲み出してこれる。これは、すごいことですよ。しかし、一般にはまだまだ子どもの成長が祈れない教師が多い。子ども自身が自発的に学び、

行動し、価値創造していけるように、教師がエンジンをかけてあげなければなりませんが、そのかけ方が教条主義的になっているために、子どものやる気まで摘んでいるのが、今の教育状況ではないかという気がする。

蝦名　創価教育の考え方を身につけた教師というのは、最初は教師の方が動く割合が多くても、一学期が過ぎ、二学期が過ぎ、と時が経つうちに、今度は子どもの側が活動する割合が増えてきて、教師はちょっと支えてあげればいいというふうになってくる。六年生くらいになると、先生がいなくても自学自習ができて自分でどんどん価値創造していける。これが教育の理想だと思いますが、牧口先生に言わせれば、現在の教育はその半分もやっていない。知識を覚えさせるだけですから。知識を学び、考え、応用して、利と美と善に代表される価値を創造していく能力が増大していかなければね。

熊谷　牧口先生は明らかに児童中心主義は否定しておられますよね。子ども任せにするというのではなく、子どもが価値創造できるよう、教師が積極的に関わらなくてはいけない。指導の責任をしっかりと果たさなければならない。

辻　目的は児童のためですが、教育は児童中心主義も駄目だし、放任主義も、教授主義も駄目……。子どもと先生の関係性の上で、子どもが自発的に学び、行動していけるようにもっていけるかどうか。この点が一番問われているんじゃないかな。

蝦名　だから、私はね、教師とは何をするのか、三つ挙げるんですよ。まず、子どもを見守る。二番目は共に動く。三番目は教える。この三つを教師が心がけることによって、子どもが生き生きと成長していく。教えることだけして、他の二つをいい加減にするところに問題があると、言いたいわけですよ。いわゆるいじめだって、見守る姿勢がちゃんとしていれば、未然に防げるはずなんだよね。

熊谷　教師、さらには大人の側は子どもがどんどん伸びる力をもっていることを信じ切れないで、管理して教え込まないと分からないと思ってしまう。子どもに対する信頼が、それだけ私達大人の側に乏しいということでしょうか。教育の営為が成り立つには、教える者と学ぶ者との信頼関係が大事なんですが、この子どもへの信頼という点は、牧口先生はどう考えておられたのでしょうか。

辻　どんな子どもにだって、仏の生命があるんだ。だから、その素晴らしい生命を引き出してあげれば、必ず人間らしく向上していく。こういう考え方ですね。仏法は「十界互具」が基本ですから。

熊谷　法華経もそうですし、大聖人の御書を読んでも、我々凡夫が仏性を持っている、仏の当体であると説かれている。そういう点で、人間の生命を大切にしていかなくてはならない。生命の尊厳、個人の尊厳について、ヨーロッパの哲学とは違った観点に立つ仏法の考え方、誰もが仏性を持っている、仏の当体なんだという人間観に立つからこそ、なおのこと、子どもの可能性を信頼していかなくてはなりませんね。

辻　この間、不登校の中学生が母親に連れられて来たんですが、やっぱり友達にいじめられると言ってました。いろいろ状況を聞いた上で、君の中に仏界という素晴らしい生命があるんだよ。君は獅子の子なんだから、負けずに御本尊を拝んでみなさい、と激励したんですが、何か感ずるところがあったんでしょうね。しっかり題目をあげるようになった。母親もしっかり唱題したそうで、しばらくして、手紙が来た。彼の不登校それ自体、まだ軽かったんでしょうが、「お題目が楽しくなりました。学校に行くのも楽しくなりました。まだ悪口言う人もいるけど、何とも思わない。もう負けません」と。

蝦名　信心している場合はやはり、感応が強くなるんだろうね。

辻　うん、感応。感応だね。

蝦名　だから牧口先生は信心を大事にしたんじゃなかろうか、という感じもするわけですよ。

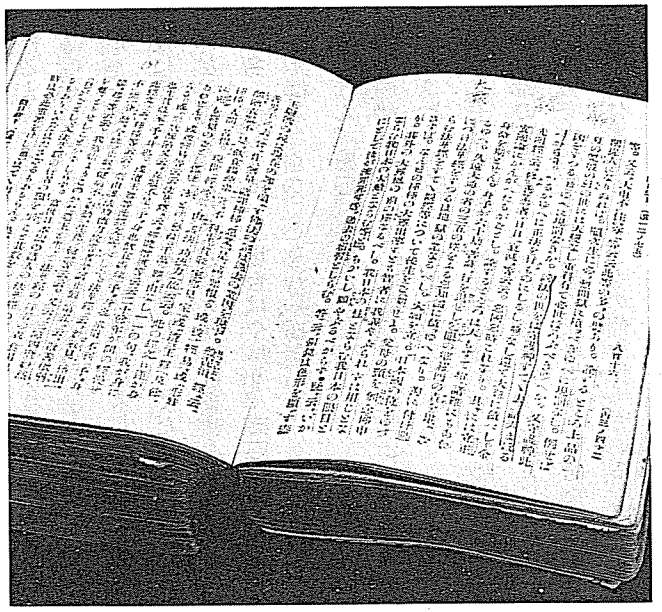
熊谷　子どもに確信を持たせるには、教師自身が子どもの生命の可能性について信念を持って教育にあたることが大切です。生命の可能性に対する絶対的な信念が、教師の側にあるし、子どもの側も持っている、教師も子どもも生命の可能性について信じあっている、そういう人間関係になればいいわけですね。

辻　池田先生も、この夏、ベトナムの国際教育学術会

議へ寄せたメッセージの中で触れておられましたが、考え方としては、法華経で説く「開示悟入」なんかもそうですね。法華経方便品には「諸仏世尊は、衆生をして仏知見を開かしめ、清浄なるを得せしめんと欲するが故に世に出現したもう……」とあります。大聖人も「御義口伝」でこの点について述べられていますが、簡単に触れておきますと、仏がこの世に出現する目的はただただ衆生の生命に内在する仏の知見を開かしめ、示し、悟らしめ、入らしめることにあるということを意味している。そこから牧口先生は、素晴らしい生命を開き顕していく、知恵を発現していくプロセスに心を砕かれた。

熊谷　「開示悟入」というのは、教育では価値の創造に子どもを向かわせていく有効な教育の方法の段階ではないかと思うんですが……。

辻　そうですね。例えば、小学校の教科書に「さいた　さいた　さくらが　さいた」という表現がありましたよ。牧口先生は「ないた　ないた　からすが　ないた」の文を示して、どうだ、同じところはどこだ、違うところはどこだと。文の形は同じだけれど、表現が違う。じゃあ、



牧口所持の御書には多くの赤線や書き込みがある。牧口の一生は、まさに御書に仰せの通りの民衆の幸福と平和のために走り抜いた不惜身命の人生であった。

皆も同じように考えてみよう。そうしたら「とんだ　とんだ　かえるが　とんだ」とか、いろんな言い方ができますよね。文の構造、表現方法というものが分かれば、誰もが文章を作れるんだと。

蝦名　いわゆる「文型応用主義」の作文指導ですね。

辻　そう、友達と交換してもいい。明日まで一つ考えて、と提案してもいい。大事なことは興味を持たせる、心を開かせる。それが「開」ですよ。表現を教える、同じような言い方ができることを「示」す。それで、他にも言わせて、比べさせる。そして、どこが同じで、どこが違うか。「よく分かった」。つまり「悟」ですね。後は応用。今度は自分でどんどん作っていく。単元が替わっても知恵を発揮して取り組んでいく。それが「入」の段階ですよ。

蝦名　算数や数学も同じなんだね。

辻　鶴亀算なら鶴亀算で、同じような問題を出すんですよ。そして、自分でも問題を考えてみる、友達とも交換してみる。それで「鶴亀算と同じだ」と分かったら、その後はスラスラと解けるわけですよ。これが、戸田先生の『推理式指導算術』。仮に教師がいなくたって、あの方程式と同じだ、同じやり方で解いてみようと、どんどん自発的に進むわけですよね。

蝦名　それから、もう一つ大事だと思うのは、先ほども創価教育の「教育目的論」の話が出てましたが、「何のため」という目的を教師自身がよく分かっていない。ただ教えている。子どもの方もただ聞いている。「何のため」に学ぶのか。牧口先生がよくおっしゃる「目的」をきちっと示し、捉えさせる指導が大事じゃなかろうか、そういう感じがしてしようがないんですよね。

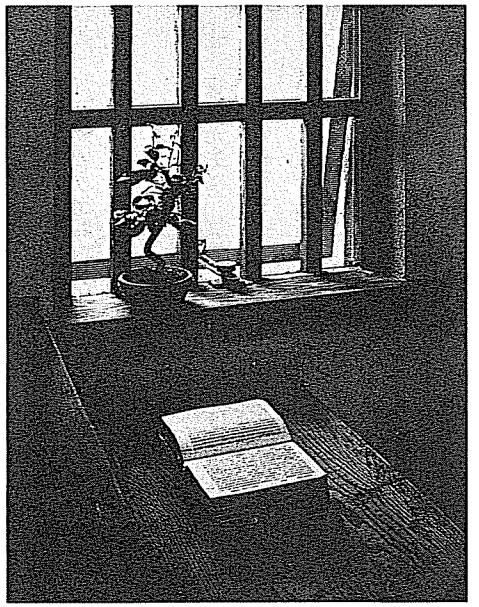
辻　牧口先生は、算数は算数、国語は国語だけにとどまらず、その教科を通して、価値創造していく子どもを育てていくことを願っておられた。それが、人間主義ということになるんでしょうね。

蝦名　人間主義というのは大事なことだね、今日的にも……。

熊谷　今、「価値創造」と言われましたが、いうまでもなく「価値創造」は『創価教育学体系』、牧口先生の教育観のキーワードですね。ところが調べてみると、大

正から昭和の初めにかけて、教育の本を書くような人はたいてい〝価値の創造〟という言葉を用いている。一種の流行語のようなものだったんですね。問題は、この人達が日本が次第に極端な国家主義、軍国主義の時代になりますと、それに迎合して〝価値の創造〟を言わなくなってしまった。本来、価値の創造というのは、個人を大切にするという思想が根底にあるわけなんですが、それはどこかに棚上げしてしまって、国家主義に迎合してしまう。しかし、牧口先生の場合は、極端な国家主義には迎合されないし、価値創造は国家主義とは結びつかない。価値の創造は仏法と結びついていく、そして非常に高い精神的な世界を作り出した。そこが大変、興味深いところですし、日本の教育史の上からも注目すべき点だと思うんです。

辻　いわんや、牧口先生は、軍国主義の弾圧に屈することなく、獄中に尊い生涯を終えられていますからね。獄中からの書簡にも烈々たる信念、気概が溢れていて、胸打たれますね。例えば、昭和十九年十月十三日のハガキには、こうあります。



昭和19年7月6日、弘教先の伊豆・下田で、治安維持法違反並びに不敬罪の容疑により逮捕される。過酷な獄中にあっても国家権力に屈することなく、平和主義を貫き御書を拝読する日々を送るが、ついに昭和19年11月18日、信念の生涯を閉じる。

「……カントノ哲学ヲ精読シテ居ル。百年前、及ビ其後ノ学者共ガ、望ンデ、手ヲ着ケナイ『価値論』ヲ私ガ著ハシ、而カモ上ハ法華経ノ信仰ニ結ビツケ、下、数千人ニ実証シタノヲ見テ、自分ナガラ驚イテ居ル。コレ故、三障四魔ガ紛起スルノハ当然デ、経文通リデス……」

獄中でまで、どうしてカントを精読するのか。牧口先生の求道の心は誰も真似できないくらい強かったわけですが、私は勉強しているというよりは、カントの矛盾を突いているんだと思うんです。つまり、誰も、価値体系からは真をはずすべきだと指摘していない。私だけであり、それも上は仏法の信仰に結びつけ、下は数千人に実証したことを自分ながら驚いている、と改めてかみしめているお手紙だと思いますね。

熊谷　ところが、そのカントを精読しているという部分を捉えて、牧口先生はカントを読んで死んでいった、最後までカントに学んだカント系統の学者にすぎないと解釈する人がいるんですけれども、それは明らかに間違いですよね。

辻　そうです。真理は価値体系に入らない、真、善、美ではなくて利、善、美だと、はっきり言ってるんですから。

熊谷　牧口先生は、人間の幸福と社会の平和を真剣に求めて、仏法の道理を貫くことに殉じられた。まさに法に基づく生活、依法の生き方を身をもって実践されたわけですね、亡くなる瞬間まで。

辻　獄中でも、歓喜の境涯だよね。部分的だが、牧口先生の信仰の強靱さ、心境が窺える獄中からの書簡をもう少し、紹介しておくと――。

「……一個人から見れば、災難でありますが、国家から見れば、必ず『毒薬変じて薬となる』といふ経文通りと信じて、信仰一心にして居ます。……」

「……お互に信仰が第一です。災難と云ふても、大聖人様の九牛の一毛です、とあきらめて益々信仰を強める事です。広大無辺の大利益に暮す吾々に、斯くの如き事は決してうらめません。経文や御書にある通り、必ず『毒変じて薬となる』ことは今までの経験からも後で解ります。……」

「……戦地をおもうと、がまんができます。大聖人様の佐渡の御苦しみをしのぶと何でもありません。過去の業が出て来たのが経文や御書の通りです。……」

蝦名　牧口先生は決して悪いことをしたわけではない。ご存知の通り、伊勢神宮等の参拝を拒否したり、大麻（神札）を祭ることを謗法として禁じたために、治安

維持法違反並びに不敬罪で逮捕され、獄中で逝去された。しかし時を経るごとに、その思想と行動は世界的に高まっています。

辻　仏法の信仰、御本尊には広大無辺、宇宙大の功徳があるってことを確信している証拠だと思うんですよ。だから、牢屋の中に入っても恨むことはない。国家も恨まないんだね、牧口先生は。経文通りだから、これでいいんだと。

熊谷　一個の自分の生命を超えて、境涯が宇宙大に広がっている。この五尺の肉体、自分のことなんかどうでもいいんだ、もっと国家のこと、民衆のこと、世界のこと、人類全体が救済されることが大事なんだ――そういう気持ちに最後はなっておられるわけですね。これは人間が到達し得る最高の精神の世界ですね。まさに法華経の行者の実践、日蓮大聖人の不惜身命の民衆救済の戦いに通ずる世界ですね。

辻　この牧口先生のご精神をそのまま受け継いで、戸田先生、池田先生が、人間主義の道、平和主義の道を世界に広げてこられた。私達もまた、少しでも、世界の平和と人類の幸福のために貢献していけるような実践を、日々、重ねていきたいと思う。それが、大聖人はもとより、歴代会長に対する弟子としての報恩の行動になるのだと、自分自身に絶えず言い聞かせています。

蝦名　SGI（創価学会インタナショナル）の世界的な広がりに呼応するように、牧口先生の『創価教育学体系』も今や、英語版、ポルトガル語版、ベトナム語版が刊行されている。創価教育の普遍性というものに、感慨を新たにする昨今ですが、私も生涯向上の精神で、精一杯生き抜いていきたいと思っています。

（つじ　たけひさ・創価学会参議会議長）
（くまがい　かずのり・創価大学教育学部教授）
（えびな　ともあき・東京創価小学校名誉副校長）

写真提供・聖教新聞社